

教育実習事前指導に係るSA業務の導入とその成果

宮 内 孝
五十嵐 亮

1. はじめに

近年教学改革の一環として、SA（スチューデント・アシスタント）を多くの大学が取り入れ、特に実習・実技系の授業においてその効果があると報告している。SAは、主に学部生が活動の主体で、教員の授業補助をしたり、下級生からの相談に応じたりする。年齢の近い学部生同士なので、サービスを受ける学生にとってはTA（ティーチング・アシスタント）以上に親近感があり、話し掛け易く相談もし易い良さがある。SA自身にとっては、後輩に教えたり、授業サポートを通して教員に教えられたりする過程を通して、学修習得をさらに深めるとともに人間として成長することができる。

しかしながら、教育実習・模擬授業など多くの実習・実技を伴う授業を実施している子ども教育学科においては、SA活用は未着手である。

そこで、小学校教育実習指導へのSA導入の試みとその実践報告を行うことで、今後の本学科におけるSA活用のあり方について考える。

2. SA導入計画の概要

(1)小学校教育実習を優秀な成績で履修した4年生6名をSAとして選出する

(2)第一筆者の指導の下、指導補助及び学生への助言を行う

教育実習指導は、教育実習の事前指導、実習期間の指導、事後指導の3つに大別できる。それぞれの指導には、異なった指導目標があり、その指導目標達成に向けて、SAには下記内容の活動を設定した。

- ・教育実習事前指導：教育実習への取組み・学習指導案作成・模擬授業等の指導補助・助言
- ・教育実習期間：教育実習への取組み・教育実習日誌の書き方・教材準備・研究授業の記録

作成等の指導補助・助言

- ・教育実習事後指導：教育実習の省察の取組みへの指導補助・助言

(3)教育実習終了後に、SA活動を通してのSA自身の教育効果についての調査を行い、その結果から今後のSA活用について検討する。

尚、SA業務後には、業務内容と業務を通して得た課題を業務日誌に記入させることで、自己の活動を振り返るようにした。

3. SAの活動の実際

SAの活用は、表1に示すように教育実習事前指導で7回、事後指導で2回、教育実習中はその都度活用した。その活用の詳細を下記に述べる。

(1)教育実習事前指導：算数と道徳の学習指導案作成では、第一筆者による学習指導案作成の全体指導後に、グループワークを行った。このグループワークの進行や学習指導案作成の助言を行わせることで、個別指導の充実が図ることが出来た。模擬授業では、模擬授業の進め方などや模擬授業の振り返りのグループワークの進行や助言を行わせた。特に、模擬授業に対する不安感やつまづきについては、同じ経験のあるSAであるが故に、共感的な理解に基づいた助言を行うことができた。

(2)教育実習期間：大学周辺の公立小学校において、本学科の教育実習は実施されるため、学生は教育実習校から退庁すると、大学に戻って日誌を書いたり、授業の準備をしたりする。このような取組みを充実させるために、SAを活用した。SAは、平日18時～21時までの間、大学に戻った学生への助言を行っていた。その際、SAには、自己の体験を踏まえながら、助言をするように指示した。

特に、研究授業に向けての模擬授業への助言の要請が多かった。また、学生が実習中の出来事をSAに話すことで、当該学生の不安を解消したり

表1 平成30年度 小学校教育実習 事前・事後指導におけるSAの活動

回	月 日	曜 日	主な内容	SAの活動内容
1	4月11日	水曜日	◇教育実習校受け入れ校長講話 ◇教育実習の計画理解	
2	4月18日	水曜日	◇小学校学校組織と教育課程 ◇実習校訪問計画	
3	4月25日	水曜日	◇算数の授業概要についての理解 ◇算数の指導案作成についての理解	
4	5月2日	水曜日	◇道徳の時間の授業概要についての理解 ◇道徳の時間の指導案作成について	
5	5月9日	水曜日	◇教育実習を充実させるためのグループワーク	
6	5月16日	水曜日	◇算数の授業概要と指導案作成についての理解	指導案作成についてのグループ協議の進行や助言
7	5月16日	水曜日	◇好感を与えるマナー講座	
8	5月23日	水曜日	◇道徳の時間の指導案形式と授業の実際の理解	指導案作成についてのグループ協議の進行や助言
9	5月30日	水曜日	算数 指導案作成①	指導案作成についてのグループ協議の進行や助言
10	6月6日	水曜日	道徳 指導案作成①	
11	6月13日	水曜日	算数 指導案作成②	
12	6月20日	水曜日	算数 指導案作成③	
13	6月28日	木曜日	道徳 指導案作成②	
14	6月27日	水曜日	算数 指導案作成④	
15	7月5日	木曜日	道徳 指導案作成③	
16	7月4日	水曜日	算数 指導案作成⑤	
17	7月12日	木曜日	道徳 指導案作成④	
18	7月11日	水曜日	道徳 指導案作成⑤	
19	7月19日	木曜日	◇模擬授業の進め方の理解 ◇指導技術について	模擬授業の進め方についてのグループ協議の進行や助言
20	7月25日	水曜日	算数 模擬授業① 学生相互	模擬授業の事後研究会の進行や助言
21	7月26日	木曜日	道徳 模擬授業① 学生相互	模擬授業の事後研究会の進行や助言
22	9月26日	水曜日	算数 模擬授業②	
23	10月3日	水曜日	算数 模擬授業③	
24	10月10日	水曜日	道徳 模擬授業②	
25	10月17日	水曜日	道徳 模擬授業③	
26	10月24日	水曜日	道徳・算数 模擬授業	
27	10月29日	月曜日	教育実習直前指導	教育実習中の取り組みや学び方などについてグループ協議の進行や助言
教育実習 11月5日～11月22日				教育実習の日誌の書き方や授業準備などについての助言
28	11月28日	水曜日	教育実習の省察	教育実習省察のグループ協議の進行や助言
29	12月12日	水曜日	教育実習の省察	教育実習省察のグループ協議の進行や助言
30	12月17日	月曜日	・1. 2年生への教育実習報告会	

学びを深めたりする機会となった。

(3)教育実習事後指導：教育実習の省察会では、グループワークの進行や助言をSAに行わせた。学生の学びが深まるように、多様な意見を引き出すことや教育実習の経験がどのように今後の大学での学びに生かされるのかについて、自己の経験を述べるように指示した。また、教育実習報告会での報告の仕方について、自己の例を提示しながら助言をするように指示した。そうすることで、学生たちは自分の学びを具体的に捉えたり、今後の学びについての見通しを持ったりすることができた。

4. SA自身に対する教育的効果の調査

4.1. 目的

教育実習指導におけるSA業務を通しての、SA自身の教育的効果（教師としての力量形成や効果的な学習方略の獲得、円滑な対人関係を形成するスキル、大学への愛着等）を検討する。

4.2. 方法

4.2.1. 調査時期と対象者

南九州大学人間発達学部4年生で、2018年4月から12月にかけて行われた専門教育科目（選択）「教育実習Ⅰ（4年生は同Ⅱ）事前事後指導」のSA業務に従事した学生8名（男性5名、女性3名）を対象とした。事前指導前の調査は同年5月に8名、教育実習後の調査も同年12月に同じく8名が参加したため、全員を分析対象とした。

4.2.2. 調査内容

以下の内容から構成された、質問紙調査を行った。

- ① 被調査者に関する項目：被調査者の氏名、学籍番号、性別、年齢に関する質問を行った。
- ② 教師効力感に関する調査：春原（2007）の作成した「教育学部生用教師効力感尺度（Teacher Efficacy Scales for Prospective Teacher；以下TESPT）を用いた。本尺度は、「まとまりのあるクラスをつくる自信がある」等の「学級管理・運営効力感」に関する11項目、「授業で子どもがつまづいた時に、別の説明や例を提示することが出来る」等の「教授・指導効力感」に関する9項目、「子どもの心をつかむのが上手

である」等の「子ども理解・関係形成効力感」に関する6項目の3因子26項目で構成される。評定は「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらともいえない」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の5段階で、「そう思う」の回答から順に5～1点と得点化した。

- ③ 自己調整学習方略に関する調査：畑野ら（2011）の作成した「自己調整学習方略（Self-Regulated Learning Strategy；以下SRLS）尺度」を用いた。本尺度は、「授業を受ける前に、これから学ぶ内容を考える」等の「認知調整方略」に関する8項目、「授業中に退屈した時、頑張って集中する」等の「動機づけ調整方略」に関する6項目、「一週間の学習の予定を立てて行動する」等の「行動調整方略」に関する5項目、「物事がうまくいかなかった時、心配しなくていいと自分自身に言う」等の「感情調整方略」に関する4項目の4因子23項目で構成される。「あなたが大学の学修（授業や予復習、試験勉強、課外活動）を進める際、以下の記述がどのくらい現在の自分に当てはまるかと思うか」という指示で、「非常に当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」「どちらともいえない」「どちらかといえば当てはまらない」「全く当てはまらない」の5段階で回答させ、「非常に当てはまる」の回答から順に5～1点と得点化した。

- ④ 社会的スキルに関する調査：菊池（1988）の作成した「KiSS-18尺度（Kikuchi's Scales of Social Skills: 18items）」を用いた。本尺度は、「他人と話していて、あまり会話が途切れないほうですか」「他人にやってもらいたいことを、うまく指示することが出来ますか」等の対人関係を円滑にするスキルに関する1因子18項目で構成される。「大学や職場で周りの人とコミュニケーションを取りながら活動する際に、以下の記述がどのくらい現在の自分に当てはまると思うか」という指示で、「いつもそうだ」「たいていそうだ」「どちらともいえない」「たいていそうでない」「いつもそうでない」の5段階で回答させ、「いつもそうだ」の回答から順に5～1点と得点化した。

- ⑤ 大学への愛着に関する調査：中村・松田（2012）

表2 SA業務の教育的効果に関する認識

S A 業 務 の 成 果	自分自身の教師としての力量を高めることができた	Mean (SD)	4.25 (0.71)
	自ら主体的に学修を進めていく力を高めることができた	Mean (SD)	4.25 (0.71)
	円滑な対人関係を形成するスキルを高めることができた	Mean (SD)	4.50 (0.76)
	南九州大学(人間発達学部)への愛着を高めることができた	Mean (SD)	4.25 (1.39)

表3 SA業務前後の教師効力感、社会的スキル及び大学への愛着の変化

		SA業務 前		SA業務 後	
教 師 効 力 感	教授・指導 効力感	Mean (SD)	2.89 (0.51)	2.71 (0.77)	
	学級管理・ 運営効力感	Mean (SD)	2.95 (0.83)	3.08 (0.55)	
	子ども理解・ 関係形成効力感	Mean (SD)	3.72 (0.89)	3.47 (0.70)	
		SA業務 前		SA業務 後	
社会的スキル		Mean (SD)	3.74 (0.36)	3.73 (0.41)	
大学への愛着		Mean (SD)	4.31 (0.60)	4.23 (0.67)	

の作成した「大学への帰属意識尺度」の内、第1因子の「大学への愛着」に関する8項目を用いた。これは、「○○大学を気に入っている」「自分にとって、○○大学は居心地が良く、落ち着くことが出来る」等の項目から構成されており、「以下の記述がどのくらい現在の自分にあてはまると思うか」という指示で、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらともいえない」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の5段階で回答させ、「そう思う」の回答から順に5～1点と得点化した。

- ⑥ ②～⑤の各側面にSA業務が与えた影響に関する調査：「以下の記述がどのくらい現在の自分にあてはまると思うか」という指示で、「SA業務を通して、自分自身の教師としての力量を高めることができた」「自ら主体的に学修を進めていく力を高めることができた」「円滑な対人関係を形成するスキルを高めることができた」「南九州大学(人間発達学部)への愛着を高めることができた」の4項目について、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらともいえない」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の5段階で回答させ、「そう思う」の回答から順に5～1点と得点化した。

4.3. 結果

4.3.1. 下位尺度の構成

先行研究の因子分析の結果に従い、教師効力感を構成する3つの下位尺度、自己調整学習方略を構成する4つの下位尺度を構成した。各下位尺度の項目得点の総和を項目数で除し、教師効力感尺度については、各々「教授・指導効力感」得点、「学級管理・運営効力感」得点、「子ども理解・関係形成効力感」得点とし、SRLS尺度については、各々「動機づけ調整方略」得点、「行動調整方略」得点、「認知調整方略」得点、「感情調整方略」得点とした。また、KiSS-18及び「大学への帰属意識尺度」の第1因子「大学への愛着」については、項目得点の総和を項目数で除し、各々「社会的スキル」得点、「大学への愛着」得点とした。

表4 SA業務前後の自己調整学習方略の変化

		SA業務 前		SA業務 後	
自 己 調 整 学 習 方 略	動機づけ方略	Mean (SD)	3.38 (0.59)	3.35 (0.73)	
	行動調整方略	Mean (SD)	2.70 (0.77)	3.11 (0.48)	
	認知調整方略	Mean (SD)	3.19 (0.91)	3.66 (0.79)	
	感情調整方略	Mean (SD)	3.67 (0.82)	3.46 (0.80)	

4.3.2. SA業務前後の変化

教育実習及び事前事後指導前後における各下位尺度の平均値と標準偏差、各側面の変化にSA業務が与えた影響に関する認識については、表2・表3・表4の通りであった。

初めに、教師効力感尺度について、「時期（2条件）」「下位尺度（3条件）」を独立変数とする被験者内2要因計画の分散分析を行った。その結果、交互作用 ($F_{(2,14)} = 1.27, n.s.$)、時期の主効果 ($F_{(1,7)} = 0.38, n.s.$) 共に有意ではなかった。

次に、「社会的スキル」得点 ($F_{(1,7)} = 0.01, n.s.$) 及び「大学への愛着」得点 ($F_{(1,7)} = 0.07, n.s.$) について、「時期（2条件）」を独立変数とする被験者内1要因計画の分散分析を行ったが、どちらも有意ではなかった。

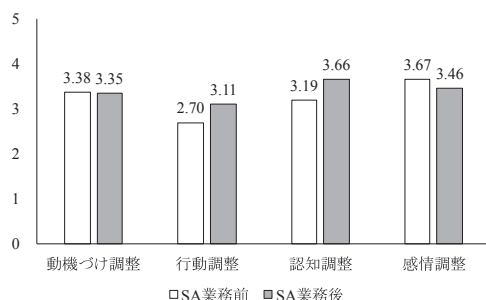


図1 SA業務前後の自己調整学習方略の変化

最後に、SRLS尺度について、「時期（2条件）」「下位尺度（4条件）」を独立変数とする被験者内2要因計画の分散分析を行った結果、交互作用が有意傾向であった ($F_{(3,21)} = 3.02, p < .06$)。「時期（3条件）」の単純主効果を検定したところ、行動調整方略において有意 ($F_{(1,7)} = 7.41, p < .05$)、認知調整方略において有意傾向であり ($F_{(1,7)} = 4.39, p < .08$)、いずれもSA業務後の方が有意に高かった。「下位尺度（4条件）」の単純主効果を検定したところ、SA業務前のみ有意であり ($F_{(3,21)} = 3.60, p < .05$)、行動調整方略よりも感情調整方略の方が有意に高かった（図1）。

5. まとめ

上記の調査結果からは、「教師効力感」「社会的スキル」「大学への愛着」の各側面にとって、SA

業務に伴う大きな教育効果は認められなかった。これらの結果は、前提として、教師としての高い資質能力及び大学への深い愛着を備えている学生がSAとして採用されている事から考えると、当然の結果ともいえる。むしろ、これら調査項目の多くが高い水準で維持できたことは、SA活動の成果ともいえるかもしれない。

その一方で、自己調整学習方略のなかでも、特に「授業を受ける前に、これから学ぶ内容を考える」等の「認知調整方略」と「一週間の学習の予定を立てて行動する」等の「行動調整方略」がSA業務前後で有意に高くなっていた。これは、学生に助言指導を行う「教授者」としてのSAの自覚を強く持ったことが、自分自身の学習に向かう姿勢態度にも良い影響を与えた結果とも解釈できるだろう。

「SA業務を通して得た成果」「SA業務のなかで困ったこと、今後改善を求めること」についてSAの記述をまとめたのが表5である。当初は、SAとして学生に助言できるかと不安をもっていた学生が、SA活動を通して自信を持って助言を行った様子が、この記述からうかがえる。また、「上手く伝えられなかった」等と学生に教えるSAであるからこそその学びや課題を得ることができている。この学びは、平成31年4月からの小学校教員としての教育実践に励むための貴重な経験である。

教育実習にSAを初めて導入することができた。SA活用による教育効果が十分に期待できる可能性を持っていることが分かった。今後は、SAへの事前指導や授業中のSAへのフィードバックのあり方、業務日誌の活用のあり方などの課題について検討していきたい。また、SAの助言を受けた学生の教育効果の詳細な分析にも取り組まなければならない。このような課題を解決して、次年度もSAを活用した教育実習指導改善に取り組みたい。

6. 謝辞

本研究は、平成30年度南九州学園学長裁量費（事業課題：「実習・実技を伴う授業充実のための学生アシスタント活用の在り方」）の助成を受け

て行われた。ここに記し、感謝致します。

表 5 SA 業務を通しての成果と課題

1. SA 業務を通して得た成果について

- ・学習指導案作成にかかわることで、授業展開や進め方には多様な方法があることを学んだ。
- ・自分自身の教育実習等で実践したことを見直す機会となった。
- ・「道徳」として教育実習を行った私にとって、「特別な教科道徳」の学習指導案にかかわることができて大きな学びとなった。
- ・学習指導案作成について忘れていた部分を思い出すことができた。
- ・今までに指導をしたこともない単元について助言をする機会があり、その単元についての教材研究ができた。
- ・様々な指導法を考え、これからの小学校での教育実践に使っていこうという意欲が高まった。
- ・助言をしたり、他の SA の助言を聞いたりすることで、新たな考えが生まれて勉強になった。
- ・同じ SA と話す中で、指導技術などの知識が広がった。
- ・後輩学生とかかわり交友関係が広がったことで、学部への愛着が深まった。
- ・自分の考えを表現する機会が多く、以前よりも上手く伝えられるようになった。
- ・後輩学生の成長を間近で見ることができてよい刺激となった。
- ・自分の経験をわかりやすく伝えることの難しさを知った。

2. SA 業務のなかで困ったこと、今後改善を求めることについて

- ・気軽に相談できるような雰囲気作りに努めたい。
- ・本人が考えて行わなければならないことまで、先取りして助言や実際に手伝いを行った。学生を観察して、どの程度まで助言すればよいかの見極めが大切である。
- ・SA であることがわかるような名札があると、相談しやすいと思う。
- ・模擬授業等の助言がうまくできないこともあった。
- ・実習経験のない学年の学習指導案や模擬授業への助言には戸惑いを感じた。